

日上和田古墳

津山市埋蔵文化財発堀調査報告第6集

1981

津山市教育委員会

序

津山市日上和田古墳は昭和55年度の日上地区土地改良整備事業（ほ揚整備事業）施行区域内にあり、事業実施にあたり緊急発掘調査したものです。

この古墳付近には日上天王山古墳、日上畝山古墳群などがあり古墳時代を研究する上で非常に重要な地域であります。本古墳はこれらの古墳群との関連において注目すべきものでありましたが、残念ながら破壊がかなり進んでおり当初予想していた成果にはいたらなかったものの古代の様子を知る上で貴重な資料を得ることができました。調査は予定期間より多少長引きましたが、無事作業を終わることができましたので、ここに調査の結果を報告いたします。各位のご活用をいただければと存じます。

最後になりましたが、この調査に際しご協力をいただきました関係各位に深く謝意を表します。

昭和56年3月31日

津山市教育委員会

教育長 福島祐一

目 次

第1章	立地と周辺の遺跡	1
第2章	調査の経過	2
第1節	調査に至る経過	2
第2節	調査の経過	3
第3章	調査の記録	4
第1節	古 墳	4
第2節	住居址	13
第3節	土 扱	15
第4章	結 語	16

例　　言

- 本書は津山市教育委員会が、津山市日上地区の土地改良総合整備（同和）事業としての、
ほ場整備事業の一環として実施した日上和田古墳発掘調査の報告書である。
- 調査は昭和55年5月1日から6月5日まで実施した。
- 調査にあたっては、墳丘測量に社会教育課安川豊史の援助を得た。
- 遺物整理は、津山市埋蔵文化財発掘調査補助員松本真澄、光延福造の協力を得た。
- 本書に用いた高度は海拔高である。また、方位は磁北である。
- 本書の執筆は社会教育課行田裕美が行なった。
- 本書の作成にあたっては、社会教育課瀧澤哲夫、中山俊紀、安川豊史の助言を得た。

插　　図

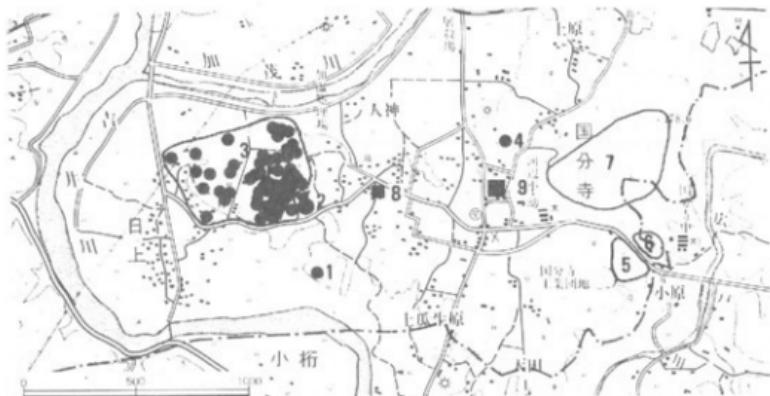
第1図	日上和田古墳と周辺跡分布図	1	第10図	墳丘断面図	10
第2図	調査前墳丘測量図	3	第11図	盛土内遺物実測図	11
第3図	表土除去後墳丘測量図	4	第12図	住居址・土括位置図	12
第4図	周辺断面図	5	第13図	住居址実測図	13
第5図	ハニワ出土状態実測図	5	第14図	住居址内遺物実測図	14
第6図	墳丘表面及び表土中遺物実測図(1)	6	第15図	土括及び遺物出土状態実測図	15
第7図	墳丘表面及び表土中遺物実測図(2)	7	第16図	土括内遺物実測図	16
第8図	表土中ハニワ実測図	8	第17図	表採瓦実測図	17
第9図	トレンチ配置図と墳丘断面図	9			

図　　版

図版1-1	調査前(東から)	図版3-1	集石出土状態
2	調査前(北から)	2	ハニワ出土状態
3	立木伐採後(東から)	3	集石・ハニワ出土状態(西から)
4	立木伐採後(北から)	4	住居址発掘風景
5	古墳発掘風景	図版4-1	土括及び土器出土状態
6	古墳発掘風景	2	住居址・土括
図版2-1	周溝(西から)	3	住居址・土括
2	周溝(東から)	4	和田古墳より畠山古墳群を望む
3	墳丘東側断面	図版5	出土遺物(1)
4	墳丘南北断面	図版6	出土遺物(2)
5	周溝断面		

第1章 立地と周辺の遺跡

日上和田古墳は岡山県津山市日上字和田275番地に所在する。中国山地から南に樹枝状に派生する低丘陵の間に挟まれた小支流は南下して吉井川へと合流する。吉井川は津山市街地に入り、流路を東へと大きく変え、津山市川崎付近からふたたび流路を南へと変える。丁度この付近で加茂川と合流する。この一帯は歓山と称する一独立小丘陵を有する沖積平野をなしている。この地域は津山市内においても、非常に遺跡の密なところで、特に日上歓山古墳群を代表とする古墳の密集地である。また、古墳時代以降奈良時代になると、美作国分寺、美作国分尼寺もこの地におかれなど、古代においてはかなり重要な地位を占めていた地域と考えられる。日上和田古墳(第1図-1)は歓山から南へ援やかに延びた低丘陵の先端部に1基だけ独立して位置しており、すぐ南には吉井川を見おろすことができる。周辺の遺跡を概観すると、日上天王山古墳(第1図-2)、日上歓山古墳群(第1図-3)、国分寺飯塚古墳(第1図-4)、国分寺長歓山古墳群(第1図-5)、国分寺長歓山北古墳群(第1図-6)、観音山古墳群(第1図-7)、美作国分尼寺跡(第1図-8)、美作国分寺跡(第1図-9)などがあげられる。日上天王山古墳は前長55mの前方後円墳で、前方部の形態などから津山市内で最古の古墳に属するものと考えられている(註1)。日上歓山古墳群は前方後円墳1基と円墳60基の計61基からなる古墳群で、5世紀後半から6世紀前半にかけての古式の群集墳である(註2)。国分寺飯塚古墳は直徑35m、高さ6mの円墳で、墳丘斜面には河原石による葺石がみられる。5世紀前半頃の築造と考えられている(註3)。国分寺長歓山古墳群は10基、国分寺長歓山北古墳群は14基の円墳よりなり、6世紀初頭から前半にかけての築造と考えられている(註4)。この内、国分寺長歓山1号墳、同2号墳は発掘調査され、5世紀後半のものと推定されている(註5)。観音山古墳群は8基よ



第1図 日上和田古墳と周辺遺跡分布図

り構成されるが、時期は不明である。美作国分寺跡は昭和51年から4ヶ年にわたる発掘調査で、金堂・講堂・中門・回廊・塔・南門・北方建物・寺域を画する溝などの主要遺構が確認され、ほぼその全容が解明された(註6)。美作国分尼寺跡は国分寺西方約500mに位置する。方1町の寺域が想定されているが、御壇については全く不明である。

註

- (1) 今井 堯 「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第1卷』1972
安川豊史 「古墳時代」『図録津山の史跡』1978
- (2) 今井 堯 前掲書
今井 堯・近藤義郎 「群集墳の盛行」『古代の日本4中国・四国』1970
安川豊史 前掲書
- (3) 今井 堯 前掲書
安川豊史 前掲書
- (4) 今井 堯 前掲書
- (5) 河本 清 「美作考古学の現状と課題」『古代吉備第7集』1971
- (6) 濑 哲夫・安川豊史・行田裕美 『美作国分寺跡発掘調査報告』1980

尚、古墳群は『岡山県遺跡地図(第1分冊)』岡山県教育委員会1973に掲載した。

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

津山市日上地区一帯では、昭和52年度より、上地改良総合整備事業(同和対策事業)として、ほ場整備事業が実施されており、昭和56年度終了予定で現在も継続中である。昭和54年度において、1ヶ所「塚」と呼ばれている高まりがあるので、分布調査を行なった結果、大きく破壊されて墳丘をわずかに残すだけの古墳と解された。この古墳は『岡山県遺跡地図(第1分冊)』には記載されておらず、新しく発見されたものであった。このため、津山市教育委員会では、ほ場整備事業の一環として発掘調査を実施し、記録保存することになった。発掘調査は昭和55年5月1日から開始し、6月5日に終了した。

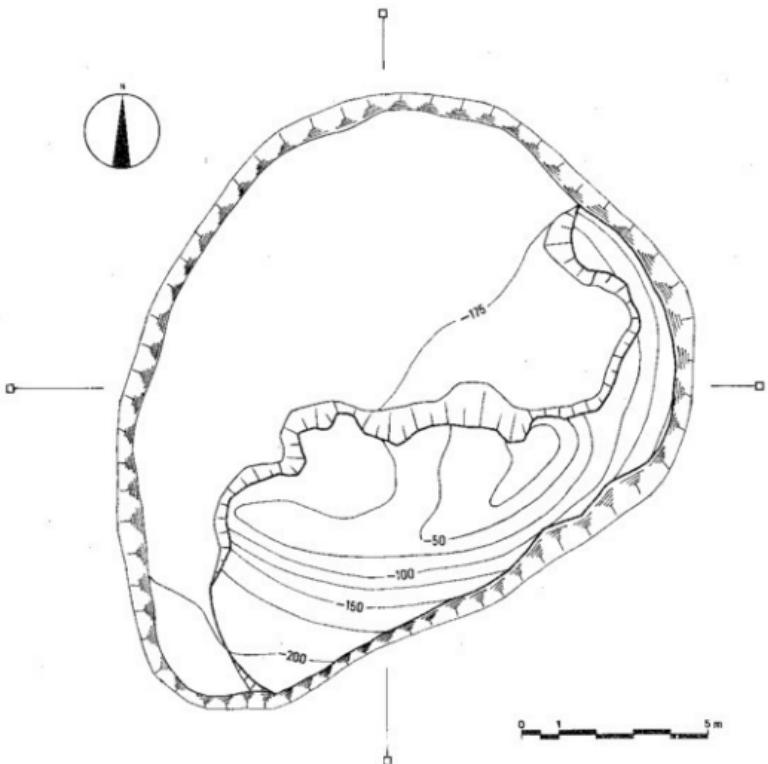
発掘調査主体 津山市教育委員会

事務担当 須江尚志(社会教育課長)

宇那木俊介(社会教育課文化係長)

調査員 行田裕美(社会教育課)

調査補助員 松本真澄



第2図 調査前墳丘測量図

第2節 調査の経過

調査地周辺はもともと水田であったが、調査時にはすでに、ほ場整備事業が進んでおり、本古墳だけが造成された水田に孤立するという状況であった。調査は昭和55年5月1日から実施したが、破壊部はゴミ捨て場に使用されており、墳丘残存部には雑木が繁茂していた。このため、調査はゴミの除去と立木の伐採から始めなければならなかった。以下、概要は次の通りである。

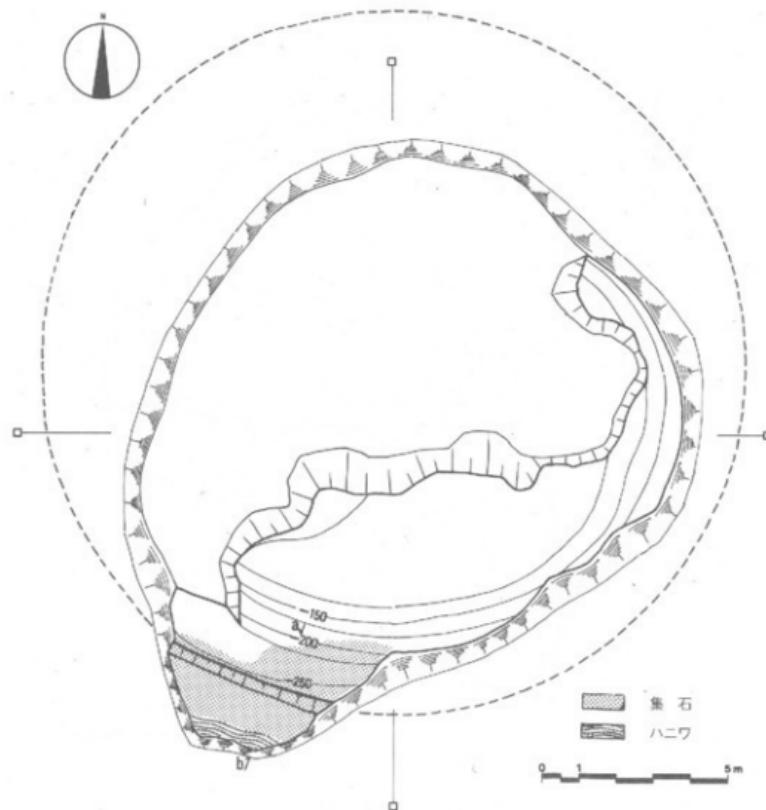
昭和55年5月1日～2日 ゴミ除去、立木伐採、草刈り、写真撮影、墳丘測量

5月6日～10日 表土剥ぎ、写真撮影、墳丘測量

5月12日～14日 墳丘切断東西トレンチ発掘、写真撮影、実測

5月16日～20日 墳丘切断南北トレンチ発掘、写真撮影、実測

5月22日～6月5日 住居址、土括発掘、写真撮影、実測



第3図 表土除去後墳丘測量図

5月23日 岡山県教育委員会文化課吉光課長補佐、河本係長視察。

尚、調査には次の方々の参加を得ました。記して厚くお礼申し上げます。

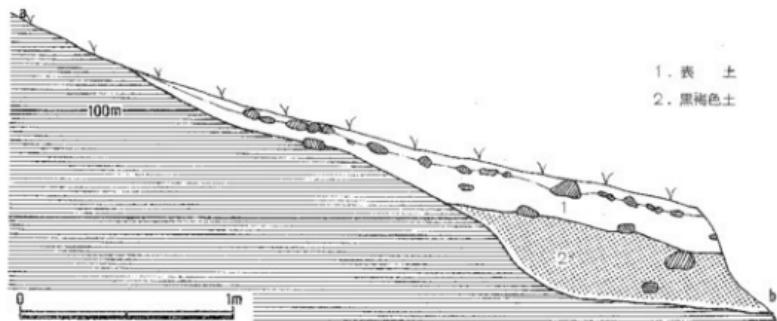
松永一平、中原通継、大笹美喜助、松永石野、立石喜美江、花房琴枝

第3章 調査の記録

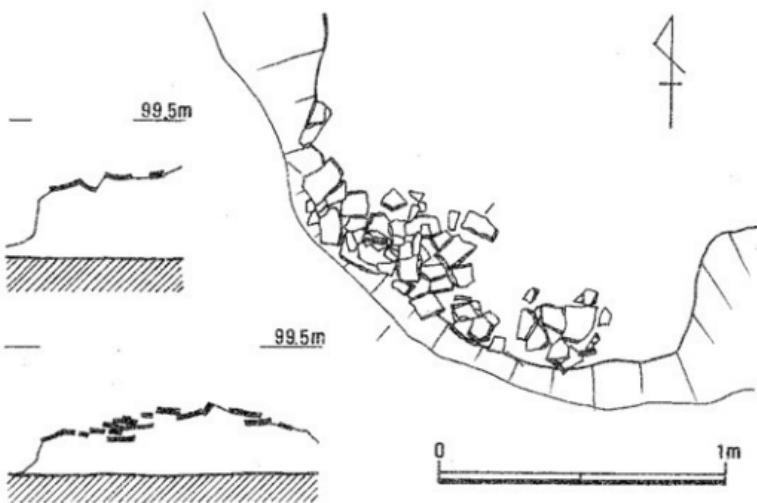
第1節 古 墳

墳丘（第2図、第3図）

本古墳は大きく破壊されており、主体部もなく、わずかに墳丘の南側と東側を孤状に残すだ



第4図 周辺断面図



第5図 ハニワ出土状態実測図

けである(第2図)。地元住民の話によると、昭和の初め頃、土取りをしたとのことであった。須恵器などの遺物が出土したらしいが、現在その所在は不明である。内部主体についても全く不明である。立木伐採、草刈り、清掃後の墳丘表面には挙大の石が散乱していた。これは地山に含包されている石で、水田、畑の耕作時に出たものを運んできて捨てたものである。墳丘残存部での墳頂は平坦、あるいはやくぼんでいるが、これも土取りの際に削られたものである。表土を除去する際に、墳丘南西部において集石を検出した(図版3-1)。当初、この集石は葺石の一部かとも考えられたが、掘り進めた結果、ガラスやビンの破片が発見され、前述のごとく、石を運んできて捨てたものであることが確認された。さらに集石の南側において、二次的

な移動による
と考えられる
ハニワ片がま
とまって表土
中より出土し
た(第5図、
図版3-1・
2)。表土除去
後の墳丘測量
図から、築造
時の墳丘の規
模を推定復元
すると径約19
mぐらいにな
るであろう。

そして、周囲
を幅約2mの周溝がめぐっていたものと考えられる(第3図)。

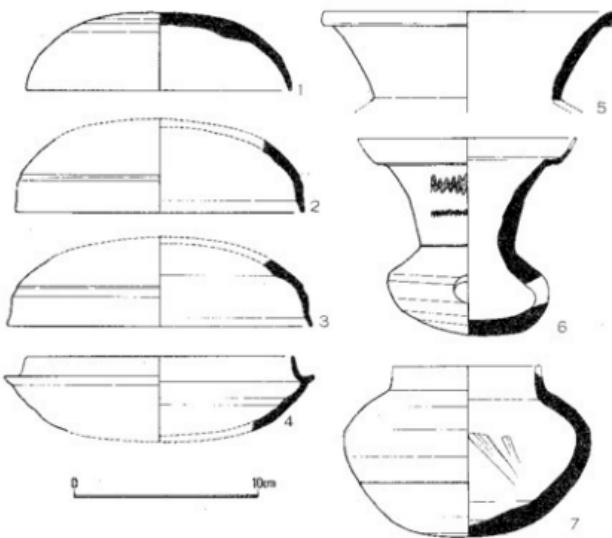
周溝(第3図、第4図)

墳丘残存部の南西部においてわずかにその形状を留めていた。残存部の長さは約4.5m、幅は約2mを測る(第3図)。深さは約50cmである。周溝埋土上層の表土中には、ハニワ片がまとまって出土したが、この出土状態はハニワが立てられていたような状態ではなく、倒れたままの状態で横たわっていること、周溝上の表土中に位置することなどから、二次的な移動によるものと考えられた。周溝埋土層はやや粘性のある黒褐色土であり、遺物は包含されていなかつた(第4図)。

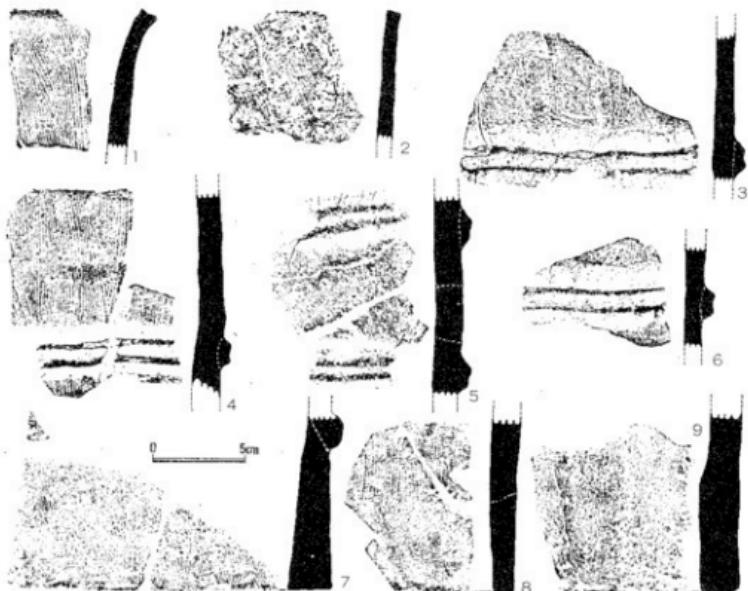
墳丘表面及び表土中須恵器観察表(第6図)

単位(cm)

番号	器形	口径	器高	形態・手法の特長、その他
1	杯 盖	14.4	4.2	器壁はねばついた。口縁端部は丸くおさめている。天井部と口縁部とを区別する境界に凹線は施されない。大井部は丸いへら削りを施す。
2	杯 盖	15.8		口縁端部の端面は内傾し、内面との間に明瞭な稜線を作っている。天井部と口縁部を区別する凹線をめぐらす。
3	杯 盖	16.7		2と同様口縁端面は内傾し、内面との間に明瞭な稜線を残す。天井部と口縁部の境界には凹線がめぐらす。
4	杯 身	14.6		たちあがり部はやや内傾しながら上方へのび、受部はやや上向きに外方へのび、端部はどちらも丸くおさめる。
5	広口 盖	16.0		やや外反する口縁部で端部は丸く外方におさめる。体部は不明。内面には淡緑色の自然釉がかかる。
6	罐	推定 12.0	推定 10.8	口縁端部を欠く。扁平な体部にラップ状に開く口縁部がつく。「J縁部」中间には幅のあるクシ掘き波状文と幅の狭い波状文が2本めぐる。
7	短頸蓋	推定 8.1	9.3	口縁部はやや内傾してたちあがる。体部外面はへら削りを施し、下部には1本の沈線がめぐる。内面には瓶方向の指印が認められる。



第6図 墳丘表面及び表土中遺物実測図(1)

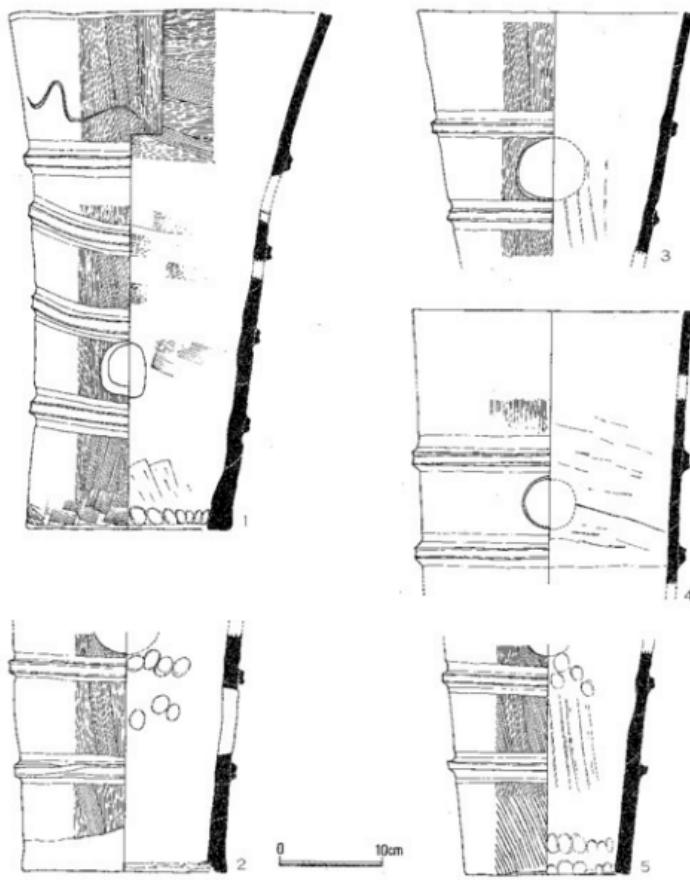


第7図 墳丘表面及び表土中遺物実測図(2)

墳丘表面及び表土中の遺物（第6図、第7図）

墳丘残存部表面には、弥生土器片、須恵器片、ハニワ片が散乱していた。しかし、いずれも小破片が多數を占めた。表土中にも、須恵器片、ハニワ片などが認められたが、ガラスびん、茶わん、針金なども含まれており、土取り、削平の際にかなり移動したものと考えられる。従って、表面採集の土器と表土中出土土器の接合もあった。第6図-1はその例である。これらのことから、墳丘表面採集の土器と表土中出土土器とは一括して扱うこととした。このうち、第6図には須恵器をあげた。個々の記述は観察表の通りである。

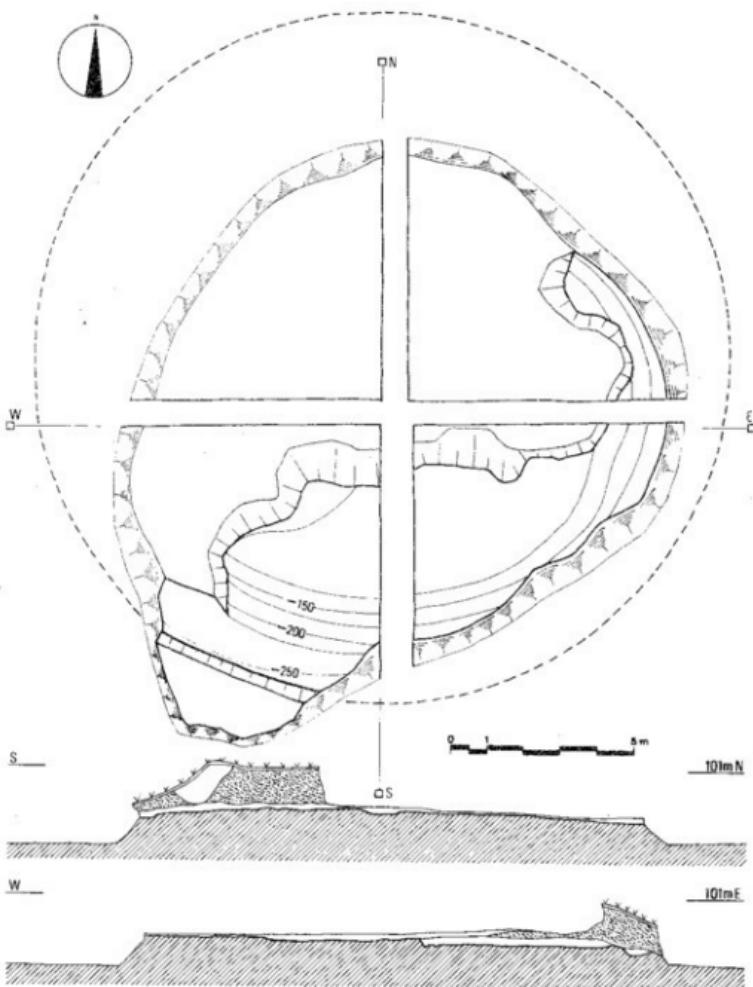
第7図にはハニワ片をあげた。ハニワは須恵器に比べて量的に多いが、保存状態が悪く、外外面の調整のわかるものは少ない。1・2は円筒ハニワの口縁部である。1は2に比べより外反する。口縁端面にはどちらも凹線をもつ。外面には縦方向の刷毛目が施されている。1の内面は口縁部近くは横なで、下方は縦方向の指なで仕上げである。7・8・9は底部である。7・9は部厚い器盤であるのに対し、8はやや薄く仕上げられている。外面はいずれも縦方向の刷毛目が施される。7・9は底部下端まで刷毛目が施されるが、8は下端まで刷毛目が及んでない。内面の調整がわかるのは8だけである。8は縦方向の指なでによる仕上げである。4・5・6は胴部である。外面は全て縦方向の刷毛目仕上げである。内面は6が横方向の刷毛目を施し



第8図 表七中ハニワ実測図

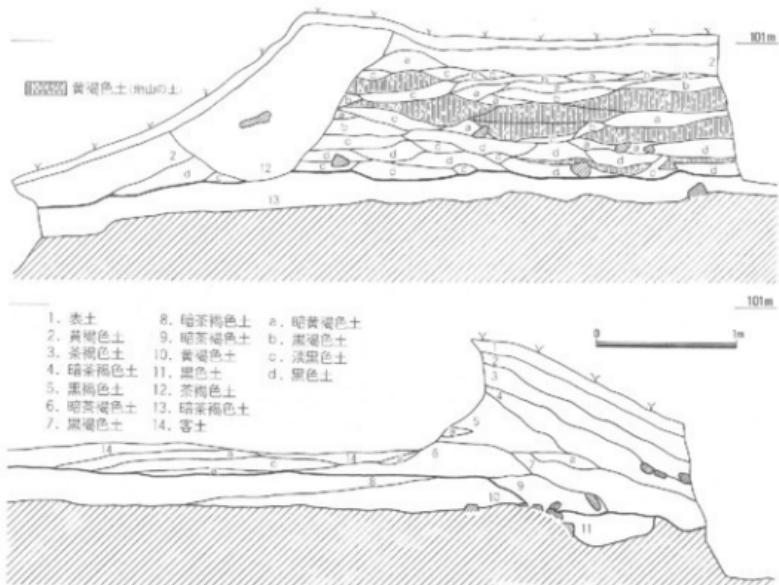
た後、その上を指でなでて仕上げている。4は縦方向の指なで仕上げである。タガはいずれも張りつけである。器壁断面は9を除き、いずれも青灰色を呈している。中でも1・3・4は非常に堅く須恵質を呈す。

第8図は周沿上の表土中出土のハニワ一括遺物である。1は唯一復元可能であった円筒ハニワである。底径20cm、口径37cm、器高55cmを測る。ただ器高については、胴部が途中欠けているので、推定復元高である。器形は底部から口縁部へかけて援やかに開き、ラッパ状を呈す。



第9図 トレンチ配置図と填丘断面図

口縁端面には凹線がめぐる。タガは胴部を4本めぐるが、タガ間は平行ではなく、幅の広いところ、狭いところがある。透し孔は下から1本目と2本目のタガ間と3本目と4本目のタガ間にあけられている。口縁部外面にはヘラ描きによる波状文が1本幅14cmにわたり施されている。内面は下端が指頭による押さえ、その上部にはヘラ削りの痕跡がみられる。胴部には横方向の刷毛目が残っているが、大半はなでによって消されている。口縁部付近は横方向の刷毛目仕上

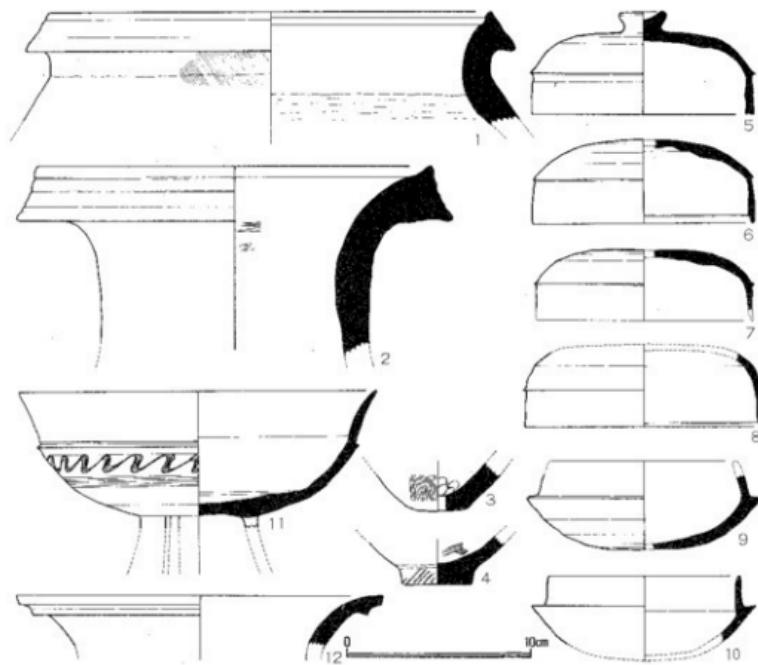


第10図 墳丘断面図

げである。外面は全て縦方向の刷毛目調整である。3・4は胴下半部を欠く。1・2・3・5がラッパ状に開く器形であるのに対して、4は円筒に近い器形である。3・4とも外面は縦方向の刷毛目仕上げである。4は保存状態が悪く、わずかに刷毛目を残すのみである。内面は3が縦方向の指なで、4が横方向のヘラ削りで仕上げている。3の口径は27cm、4は27.4cmである。タガ間には透し孔が穿たれている。2・5は胴上半部を欠く。底径は2が20cm、5が16cmを測る。外面は縦方向の刷毛目仕上げである。2の内面は指頭圧痕が透し孔の周辺に残るが、他はなで調整である。5は底部と透し孔の周辺に指頭圧痕が、その周間に縦方向の指なで痕が残っている。2には外面の縦方向の刷毛目が下端まで及んでいない。5の底部外面は下から1本目のタガより約3cm下がったところから荒い原体による刷毛目が右下に施されている。2・3・5は器壁断面が暗青灰色を呈している。

墳丘の築成（第9図、第10図）

墳丘の土層観察のため、東西、南北にトレンチを入れた。第9図に墳丘断面概念図を付けたが、残存部の状態がよく理解される。南北断面観察（第10図上）によると、地山の上に暗茶褐色の弥生土器包含層があり、この上から盛土が始まることがわかる。盛土はもっこ状運搬具によるものか、断面形がレンズ状を呈するものが多く認められる。盛土中には地山の土もかなり含まれているが、やはりレンズ状の断面形を呈するものが多い。南斜面部には、後世掘られた大き

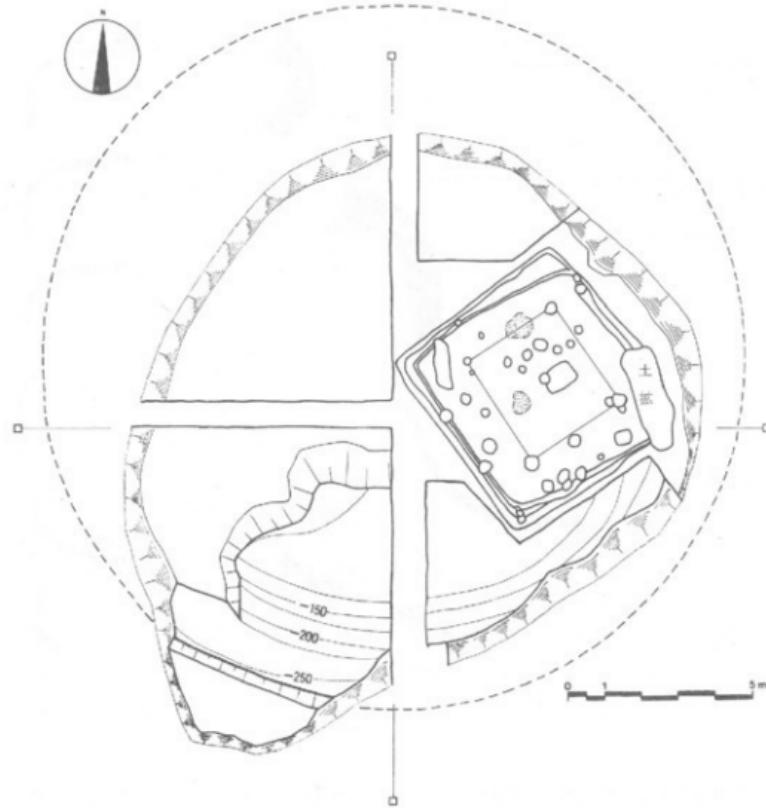


第11図 盛土内遺物実測図

な穴が観察される。東西断面（第10図下）では、南北断面にみられたようなレンズ状断面形の盛土は少なく、斜面に平行する盛土状況がうかがえる。

盛土内の遺物（第11図）

墳丘の上層観察のために入れた東西・南北2本のトレンチと住居址・土塁を掘り上げるために除去した盛土内から出土したものである。1～4は弥生土器、5～12は須恵器である。1・2は保存状態が悪く、大部分器壁表面が剥落している。1は大形の壺形土器である。口縁部端面は内傾する。上端部はつまみ上げ丸くおさめている。内面には浅い凹線がめぐる。外面は頸部に右下りの刷毛目がわずかに残っている。内面は胴部と頸部の境界まで横方向のヘラ削りが行なわれている。2は器台形土器である。口縁部端面にはわずかながら凹線が3本めぐっている。内面には横方向の刷毛目が若干残っている。3は壺形土器の底部である。外面は縦方向の刷毛目仕上げ、内面には指頭圧痕がみられる。底部には約1cmの孔が穿たれている。4は壺形土器の底部である。底部外面には叩き痕がみられる。内面は刷毛目仕上げである。底面には、細い葉脈の木の葉文様が観察される。須恵器については観察表をのせた。

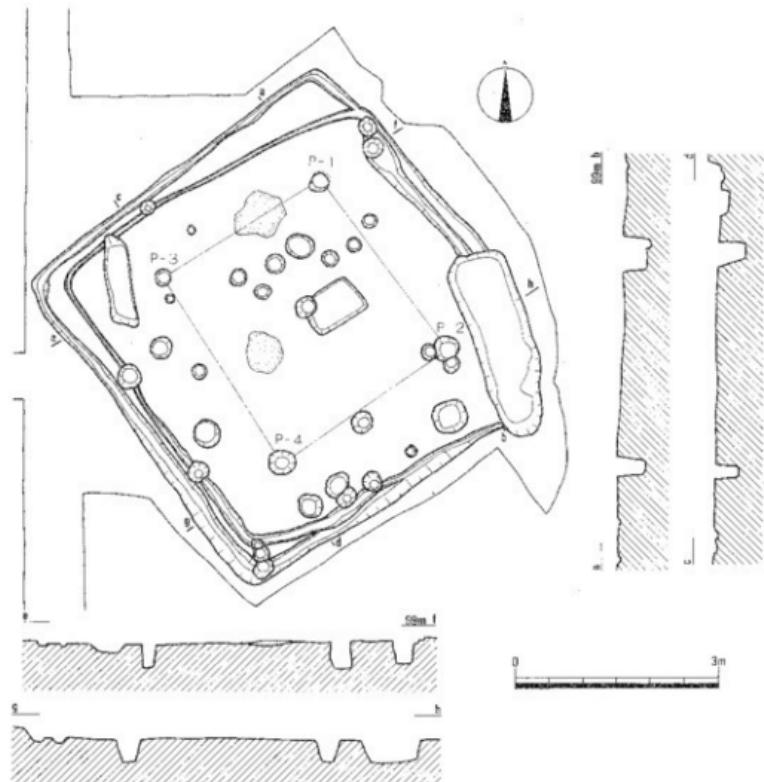


第12図 住居址 土基位置図

盛土内出土須恵器観察表（第11図）

単位(cm)

番号	器 形	口種	器 高	形態・手法の特徴。その他の	
				特 徴	手 法
5	杯 蓋	12.1	5.6	天井部はていねいにヘラ削りを行なっている。天井部と口縁部とを分ける境界は鋭角に突出する。口縁端面はほぼ平らである。	
6	杯 蓋	12.1	推定 4.6	天井部はヘラ削りをしているが、稜線は純く丸味をおびている。天井部と口縁部との縁は鋭い。口縁内面には鈍い縦がまわる。端部は丸い。天井部にはヘラ削りを施す。天井部と口縁部を分ける縁は鋭角に張り出す。微砂粒を多量に含む。口縁端部消失。	
7	杯 蓋	推定 11.8	推定 3.9		
8	杯 蓋	12.9		天井部はヘラ削りを行なう。天井部と口縁部を画す境界は短かく鋭角に突出する。内面と口縁端部の間には明瞭な稜線をつくる。	
9	杯 身			2~3mm大的砂粒を含む。器壁はやや厚い。口縁部は内傾し、受け部はほぼ水平に張り出す。底部はヘラ削りを行なっている。	
10	杯 身	10.5		口縁部はほぼ垂直にたちあがり、端部は丸くおさめている。受け部はやや上方に立ち上がる。	
11	高 杯	19.5		口縁部と底部を分ける縁は突出し、明瞭な稜線をつくる。稜線の下には波状文と沈線がある。長方形の透孔が3方にあけられる。	
12	広口壺	19.9		外壁は暗灰色を呈す。焼きは非常に堅い。口縁端面は平担に仕上げられ、下に断面三角形の突帯がつく。	

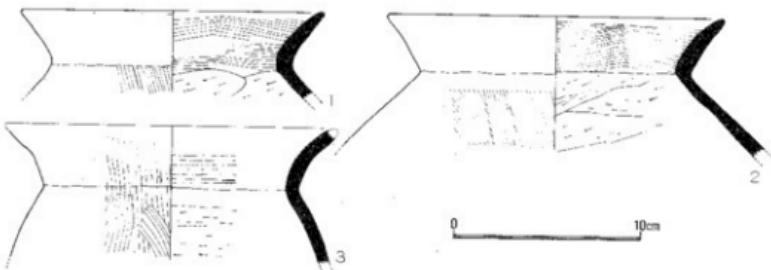


第13図 住居址実測図

第2節 住居址（第12図、第13図）

墳丘土層観察のための東西トレンチを入れた結果、墳丘東側において住居址と土塁が確認された。このため、盛土を除去し、全容を把握した。土塁は住居址東側において、重なり合った状態で確認された（第12図）。

住居址は2軒が重複して検出された。柱穴は4本であり、柱穴そのものの重複はなかった。このことから、柱穴はそのまま利用し、周溝を外方に拡張したことが考えられる。住居址の平面形は一角を北方向に向けたほぼ方形である（第13図）。拡張前の住居址は1辺約5.2mを測る。平面形は住居址の北と南の角が直角よりやや鈍角となっている。P-1は径30cm、深さ40cm、P-2は径35cm、深さ35cm、P-3は径25cm、深さ35cm、P-4は径37cm、深さ35cmを測る。P-1とP-2の間は3.1m、P-3とP-4の間は3.2m、P-1とP-3の間は2.7m、P-2とP-4の間は2.9mを測る。4本の柱穴のほぼ中央部には、長辺85cm、短辺60cm、深さ15cmの長方形中央穴が位



第14図 住居址内遺物実測図

置する。埋土は黒褐色粘質土であり、炭は認められなかった。床面にはP-1とP-2の間に約80cm×70cmの範囲と、この場所から南へ約2mの位置に約65cm×55cmの範囲2ヶ所に焼土面が検出された。これは拡張前のものと、拡張後に移動したものと考えられる。周溝の幅は約10cm～15cmであり、深さは深いところで5cmと非常に浅い。

拡張後の住居址は、正方形より長方形に近い平面形を呈している。長辺約5.9m、短辺約5.6mである。周溝は北西辺がやや狭く、10cm～15cm、南西辺は広く30cm前後である。北東辺と南東辺は内側の周溝と接している。住居址内には、主柱穴、中央穴の他に長方形落ち込み、多数のピットが検出されたが、住居址との関係は不明である。住居址埋土は墨褐色土である。埋土は住居址の南側においては、約20cmの厚さがあったが、北にいくにつれて削平を受けており、北端では周溝埋土の黒褐色土が帶状に残るという状態であった。土括上での周溝は確認できなかった。

住居址内の遺物（第14図）

住居址の埋土は南半分ぐらいで、北半分は削平されておりほとんど残っていなかった。古墳の盛土はこの埋土上層より始まっており、住居廐絶後古墳築造までの間に整地されたものであろう。住居址北半部においては、盛土最下層と住居址埋土との境界が不明確であった。このため、床面に接していたものを住居址内遺物とした。住居址のP-1とP-3との間の焼土上面よりほぼ1個体と思われる土器が出土したが、いずれも小破片で保存状態も悪く復元できるものではなかった。住居址内遺物は数十点あるが、小砂片で図示できるものはわずかであった。

1～3はともに「く」の字状口縁で端部を丸くおさめている。1の口縁部外面には細かい縦方向の刷毛目が残る。頭部から胴部へかけては荒い縦方向の刷毛目で仕上げている。口縁部内面は荒い横方向の刷毛目を連続的に施している。頭部から胴部にかけては横方向のヘラ削りで仕上げている。頭部内面にはヘラ削りによってできた稜を形成する。2・3とも仕上げの手法は1と全く同様であるが、2は口縁部外面の刷毛目が認められない。頭部外面は1・3とも丸味を帯びているのに対し、2は角をもっている。3は1・2に比べて胴の張りが少なく、すらっと下方にのびている。3は外面の仕上げに口縁部から胴部にかけて連続して荒い縦方向の刷

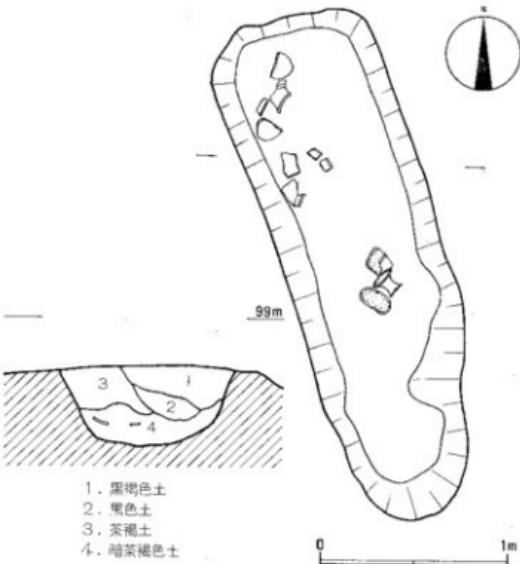
毛目を用いている。器形はいずれも變形土器である。

第3節 土 拙 (第12図、第15図)

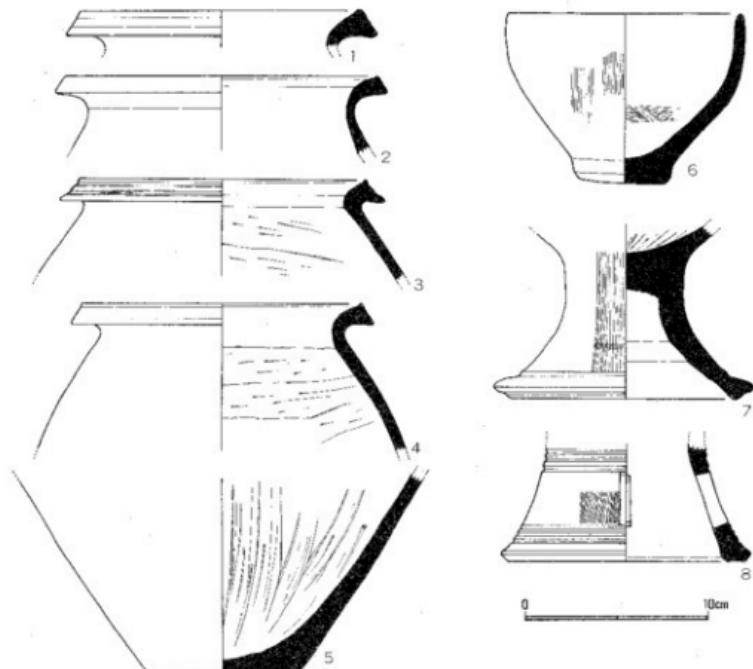
住居址の東側部分で検出された(第12図)。平面形はほぼ隅丸の長方形で、長軸を北方向に向ける。長辺2.8m、短辺0.9m、深さ40cmである。床面は南に向かってゆるやかに上がっている(第15図)。

土拙内 の 遺 物 (第16図)

埋土下層の暗茶褐色土より出土した。いずれも床面から約10cm浮いた状態で出土した。1～5は變形土器である。いずれも小破片で完形品はない。1～4は口縁部である。1は内傾する端面に退化した沈線が2本めぐる。2は口縁端面に沈線は認められず、なで仕上げである。口縁端部は上方へ少し拡張している。3はかなり内傾する端面で、端部は下方へ大きくのびている。端面には2本の凹線がめぐる。内面は横方向のヘラ削り仕上げである。4の口縁端部はやや上方に拡張し、端面には2本の沈線がめぐる。内面は頸部まで横方向のヘラ削りが及んでいる。いずれも保存状態が悪く、外面の調整は不明である。5は底部である。外面はなでによる仕上げ、内面は下から上へのヘラ削りを行なっている。6は椀形土器である。保存状態が悪く、器表はかなり剥落しているが、外面には縱方向の刷毛目が、内面には横方向の刷毛目が若干観察される。口縁端部は丸くおさめている。7は高杯形土器の脚部である。脚端は外方に張り出しているが、端部は丸くおさめている。端部上方には浅い凹線がめぐり、低い段をなしている。外面は縦方向の刷毛目による仕上げである。杯部内面はヘラ削りを行なっている。8は器台形土器である。長方形の透し孔が穿たれる。透し孔の下方には3本、上方にも凹線がめぐる。外方に張り出す端部は丸くおさめるが、端部内面と底面との境界には鈍角な稜を作っている。底面と端部との境界はやや下方に張り出している。外面には透し孔の下半より縦方向の刷毛目が観察される。上半及び内面はなで調整である。



第15図 土塹及び遺物出土状況実測図

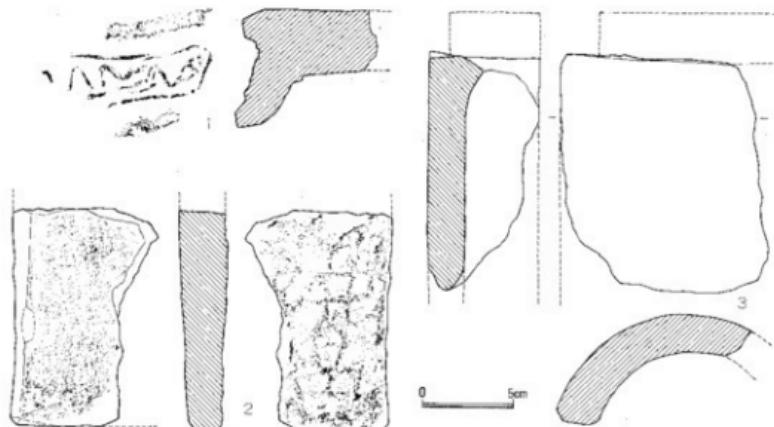


第16図 土塄内遺物実測図

第4章 結 語

本調査では、それぞれ時期の異なる3つの遺構を確認した。古い方から土塄、住居址、古墳という順である。土塄の時期は出土土器（第16図）からみると、弥生時代中期末から後期初頭にかけての時期と考えられる。この中で中期末頃と考えられるのは、8であり、残りの土器は後期初頭と考えられる。従って、土塄の時期は弥生時代後期初頭としておく。この弥生時代中期末から後期初頭にかけての時期は、丁度津山盆地の各地において弥生時代社会が定着する時期にあたり、当該地も例外にもれず弥生時代社会が定着した時期であろう。現在のところ、周辺での弥生時代集落は調査されてないが、付近の水田地には広範囲にわたって土器が散布することから、歟山丘陵を背後にした大集落が存在したことが推測される。土塄の性格は不明であるが、墓と考えておきたい。

弥生時代集落はやがて古墳時代へと受け継がれる。歟山丘陵には津山地方で最古の首長墓と考えられている日上天王山古墳が登場する。5世紀後半頃になると日上歟山古墳群が形成され



第17図 表採瓦実測図

始める。日上天王山古墳、日上畝山古墳群形成の背景には、弥生時代集落から継続的に発展してきた古墳時代集落が当然関与したことであろう。この時期の土師器については十分な編年研究が行なわれていないのが現状であるが、調査した住居址の時期は出土土器（第14図）からみて、5世紀代と推測される。この住居址が日上畝山古墳群形成に関与した集落の1軒に相当するものと考えられる。

6世紀代になると集落の移動があったことがうかがえる。すなわち、住居址の埋没後日上和田古墳が占地していることである。古墳の墳丘盛土内には弥生土器、古式須恵器が含まれていることからみても、前述したような弥生時代中期あるいは後期初頭からの流れが読み取れるであろう。盛土中の土器（第11図）には3・4など土払内出土土器よりも後出的で後期末頃の上器も含まれている。須恵器は全て古式のものである。中でも5は最古の一群に属するものである。これらの須恵器は多少の時期差はある5世紀後半頃のものであり（註1）、畝山古墳群形成期にあたる（註2）。日上和田古墳の築造時期を確實に決める遺物の出土状態、遺構はない。しかしながら、土取りの際に二次的に移動したものと考えられる墳丘表面及び表土中遺物があげられる。これらの遺物は原位置こそ保っていないが、本古墳との伴出は間違いないであろう。須恵器（第6図）2・3の杯蓋は天井部と口縁部との境界に明瞭な凹線がめぐり、口縁端面はやや内傾し、内面との間に稜を形成するなどの特徴をもっている。これらの特徴から6世紀前半頃の時期と考えられる（註3）。1はやや後出的なものと考えられるが、他は同時期のものである。ハニワは全て外面縱方向の刷毛目調整、円形の透し孔、低台形のタガ、下細りの器形などの特徴があげられる。これらの特徴はV期の新しい時期と考えられ、6世紀前半頃と考えら

れる(註4)。このハニワの時期は須恵器の時期とも一致し、日上和田古墳の築造時期を6世紀前半に比定することができよう。

日上歓山古墳群は5世紀後半から6世紀前半にかけての古式の群集墳であると考えられている。日上和田古墳は丁度6世紀前半頃の築造で、日上歓山古墳群の終末期にあたる。また、歓山丘陵から南へ援やかに延びた低丘陵上に位置することからみても、日上歓山古墳群との強い関連が考えられよう。

註

- (1) 田辺昭三 『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古クラブ 1965
- (2) この時期の須恵器として日上高祖神社裏古墳出土のものがある。
- (3) 田辺昭三 前掲書
- (4) 春成秀爾 「埴輪」『考古資料の見方(遺物編)』 1977

尚、調査中3点の瓦を採集した(第17図)。1は軒平瓦、2は平瓦で凹面は布目、凸面は荒い格子目の叩きである。3は丸瓦である。1の軒平瓦の内区は唐草文が変形し、くずれたものである。外面には1本の孤線がめぐる。外縁は高い。この特徴は美作国分寺軒平瓦Ⅱ型式のくずれたものであり、平安時代末頃と考えられる(註5)。日上和田古墳は美作国分尼寺跡南西約500mの近距離に位置することからなんらかの関連がうかがえよう。

註

- (5) 濑 哲夫氏の御教示による。



1



2



3



4



5



6

1. 調査前(東から)

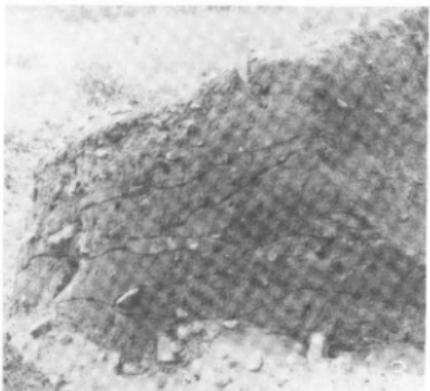
3. 立木伐採後(東から)

5. 古墳発掘風景

2. 調査前(北から)

4. 立木伐採後(北から)

6. 古墳発掘風景



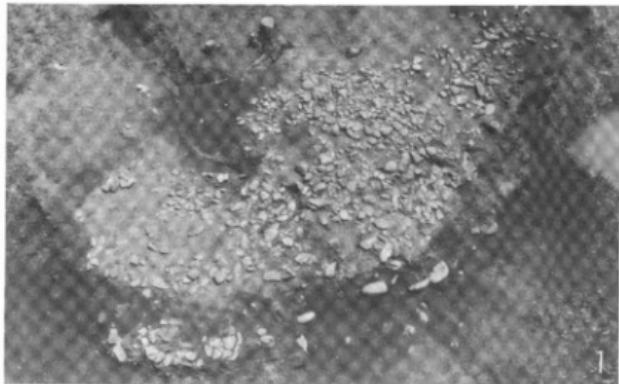
1. 周溝(西から)

3. 墓丘東西断面

5. 周溝断面

2. 周溝(東から)

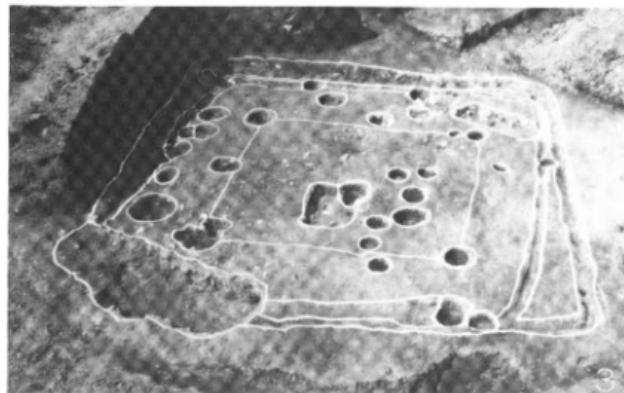
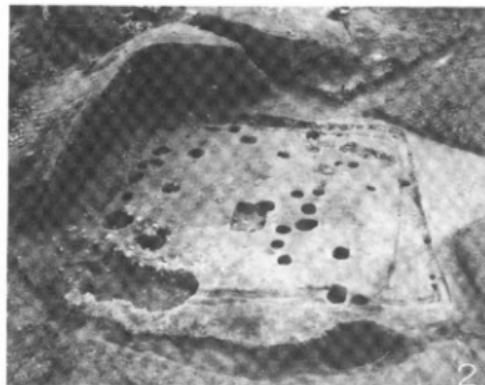
4. 墓丘南北断面



3



1. 集石出土状態
2. ハニワ出土状態
3. 集石・ハニワ出土状態(西から)
4. 住居址発掘風景

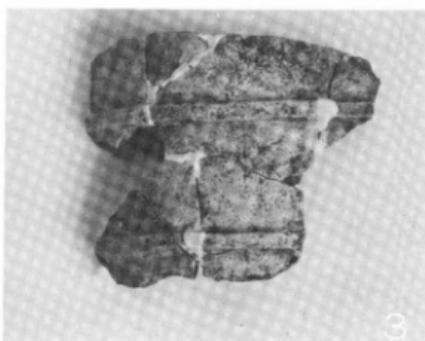


1. 土塗及び土器出土状態

3. 住居址・土塗

4. 和田古墳より畠山古墳群を望む

2. 住居址・土塗



3



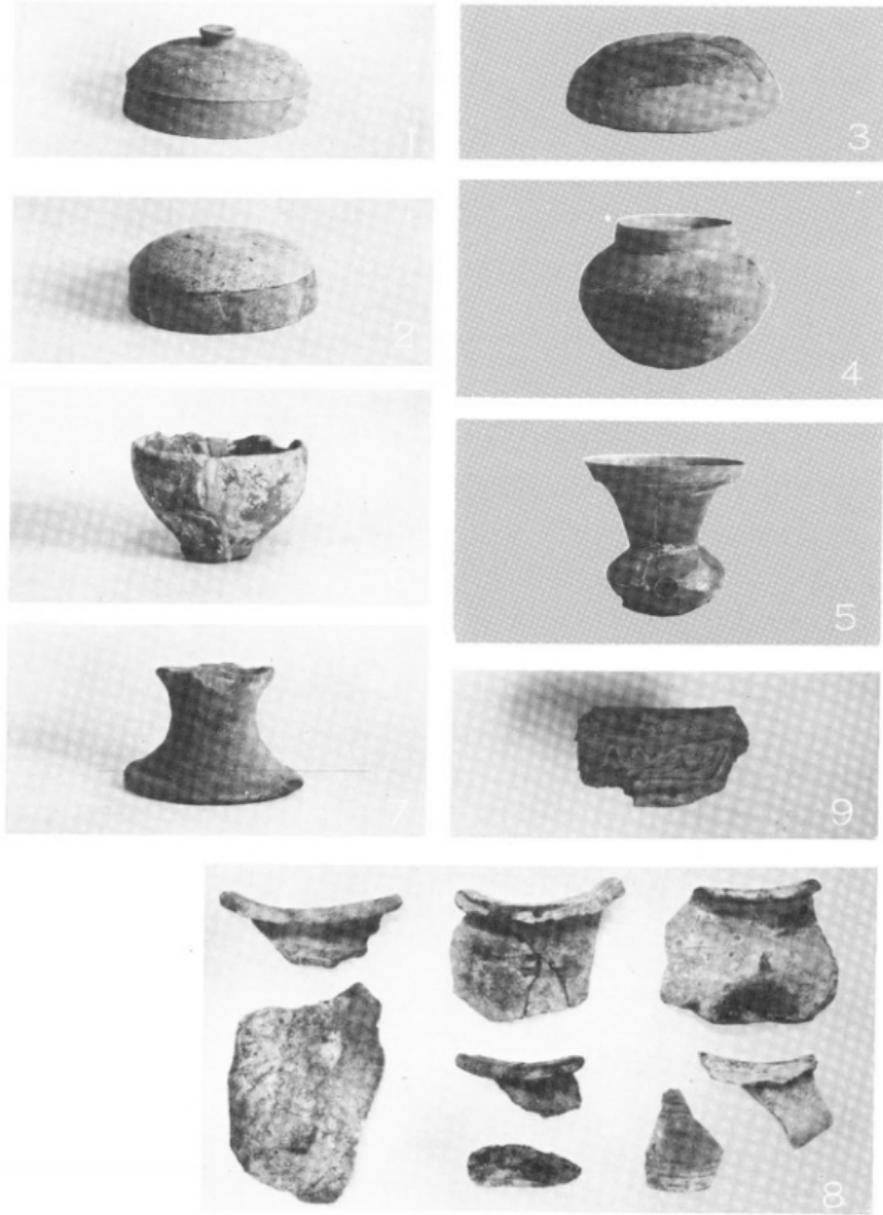
4



5

1～5 墳丘表土中出土ハニワ

出 土 遺 物 (1)



1・2 盛土内出土須恵器
6~8 土塗内出土弥生土器

3~5 墳丘表土中出土須恵器
9 表採瓦

出 土 遺 物 (2)

日上和田古墳発掘調査報告

昭和56年3月31日発行

発行 津山市教育委員会

岡山県津山市山下97番地の1

印刷 有限会社 弘文社

津山市川崎 168